

歴史を語る建物たち

秋田編
(第10回)

今日、20世紀型の開発優先社会は終焉を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

阿仁異人館（北秋田市）



秋田内陸縦貫鉄道の阿仁合駅から徒歩3分のところに、「木骨レンガ造」と呼ばれる全国でも珍しい構造の建物がある。

明治14年に建てられた、秋田県最古の洋風建築である旧阿仁鉱山外国人官舎（阿仁異人館）で、平成2年に国の重要文化財に指定された。

苦労したドイツ人技師

かつて秋田大学に日本で唯一の「鉱山学部」（現・工学資源学部）が存在したように、秋田県は古くから鉱物資源が豊富であった。延慶2（1309）年の金山発見に端を発する旧阿仁鉱山（昭和54年閉山）もその一つで、江戸時代には銅の産出で日本一を誇ったこともある。安永2（1773）年には、鉱山を経営していた佐竹藩の要請で、「天下の異才」と称された平賀源内も製錬指導に訪れた。

明治維新後の鉱山は、一時県営を経た後、明治8年に工部省（当時）の直営となった。後に初代総理大臣となる工部卿（卿とは現在の長官）の伊藤博文は、「阿仁を全国の模範鉱山にせよ」と指示し、「お雇い外国人

として日本に迎えられた鉱山技師54人のうち、異例の5人を阿仁に送り込んだ。その技師長が、ドイツ人のアドルフ・メッケルである。

明治12年に来山したメッケルは、鉱山の近代化を図るとともに、現在地に外国人技師たちの官舎を2棟建



異人館前での集合写真（撮影時期不明）。古河の社員たちによる直利（なおり）のお祝いだろうか。
出典：秋田県立図書館所蔵『旧阿仁鉱山外国人官舎調査報告書』（阿仁町教育委員会）より筆者がデジタルカメラで撮影。

てた。なお、1棟は昭和28年に焼失している。

当時はまだレンガを造る技術が輸入されたばかりで、日本のレンガはほとんど東京（深川など）で造られていたが、メッケルは地元で工場を建てて外壁に使うレンガを造った。今見ると、レンガの色や形がまちまちなのは、技術が未熟だったせいだろう。もっとも、完成した洋館に初めて接した日本人は、大きなカルチャーショックを受けたようだ。

一方で、メッケルは、鉱山で働く日本人との文化や考え方の違いにずいぶんと悩まされた。折に触れて、工部省阿仁鉱山分局長に、怒りや不満をつづった書簡を送っている。そして、明治15年に3年間の任期を終えると早々に上京し、東京大学で約1年教壇に立った後、帰国した。

他の外国人技師も明治16年までには帰国したため、建物が“外国人官舎”として使われたのは、わずか1～2年程度であった。

古河の社員が大宴会

メッケルが阿仁鉱山に残した功績は大きかった。しかし、メッケルの指導に沿った形で鉱山を経営するのに、官営では限界があった。そのため、明治18年、阿仁鉱山は古河市兵衛に払い下げられ、外国人官舎も古河の所有となった。古河市兵衛は古河財閥（第二次大戦後にGHQによって解体）の創業者で、“鉱山王”として名をはせた人物である。

その後、明治38年に阿仁鉱山の経営が古河家の個人営業から古河鉱業（現・古河機械金属）に移されたことから、外国人官舎も企業の所有となった。

古河家および企業の所有時代、外国人官舎は主に、鉱山を視察に訪れた政府高官などの娯楽・宿泊施設として使用された。また、鉱山で質量ともに優れた鉱脈が見つかった時は（これを直利なおりという）、古河社員らによる、総決起集会を兼ねた祝いの宴会も行われた。

昭和54年に旧阿仁鉱山が閉山され、昭和58年4月、外国人官舎は旧阿仁町（現・北秋田市）に無償譲渡された。そして、「阿仁異人館」として一般公開されることになった。当時の町民である小林精一氏は、秋田県の広報誌に「貴重な文化財の保護とあわせ、観光立町を目指す当町の重要な観光資源として活用する」と寄稿している（建物は、昭和31年に県の重要文化財に指定された）。

粋な地下通路

旧阿仁町では、異人館に併設する形で、昭和61年に阿仁町郷土文化保存伝承館（以下、伝承館）を建設した。見学受付は伝承館に設けられ、伝承館と異人館は、鉱山の坑道を再現した地下通路で結ばれている（異人館には直接出入りできない）。なかなか粋な演出だが、北秋田市商工観光課では「経費や人員を節約するため、両館を一体化することで管理の一元化を図った」と話す。



1階から2階へ上る階段。木造の手すりのデザインがおしゃれである（筆者撮影）。

平成元年に秋田内陸縦貫鉄道が全線開通したことから、その年の来館者は17,600人とピークに達した。しかし、その後は徐々に減少し、平成23年の東日本大震災では直接被害はなかったものの、来館者はさらに減少した。翌年も大雪で来館者が伸び悩んだため、平成18年度から指定管理者を務めてきた会社が、1年の協定期間を残して今年の3月末で解散する事態に追い込まれた。異人館は一時休館を余儀なくされたが、市では北秋田地域シルバー人材センターに管理業務を委託し、4月13日から営業を再開した。ただし、これはあくまで暫定的な措置であり、北秋田市では、次年度以降の新たな指定管理者を募集する方針である。

重文建築で結婚式はいかが

異人館をよく知る、シルバー人材センターの加藤茂行さんは「歴史ある建物だからこそ、ひっそりとたたずむ姿がよく似合う。価値を知る人や興味関心のある人にじっくり見てもらいたい」と、過度な商業化に警鐘を鳴らす。北秋田市も基本的な考え方は同じようだが、「次の指定管理者が、また営業不振で撤退されても…」と悩める胸の内を語る。

「異人館で結婚式をやったらどうかという若い人の声もあるのだけどね」と加藤さんが言うので、筆者が「山形市の旧県会議事堂も国の重要文化財ですが、複数のホテルが結婚式に利用していますよ」と水を向けたところ、大変驚いた様子であった。加藤さんも北秋田市の担当者も、異人館は国の重要文化財だから、結婚式などできるはずがないと考えていたようだ。

もちろん、文化財としての厳しい規制はあるが、建物をうまく活用すれば、来館者はまた増えていくと思われる。「（建物を取り巻く）ベランダにベンチを置いてはどうか」という北秋田市の担当者の意見などは積極的に検討してもよいのではなかろうか。

明治の洋風建築の代表格であった鹿鳴館（明治16年建築、昭和15年解体）よりも前に建てられた阿仁異人館。活躍の第二幕は開けたばかりである。

（フィデア総合研究所主事研究員・山口泰史）